

自己の動きを探究し高めることができる子供を育てる保健体育科の授業

I 主題設定の理由

次期学習指導要領では、改訂の基本的な考え方を「心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、『知識・技能』、『思考力・判断力・表現力等』、『学びに向かう力・人間性等』を育成することを目標として示す。」¹⁾としている。また、鈴木直樹氏（東京学芸大准教授）は、「ただ、速く走ることができるとか、器用に動くことができるとか、そういう身体の有能性こそが大切なのではなく、運動する喜びを他者と共に共有し、生涯にわたって運動に親しむ基礎となる知識や技術を学んでいく。そのプロセスで活用されるスキルや人間性を有する身体の育成こそが重要」²⁾であると述べている。そこで、本校保健体育科では、体育の見方・考え方^{注1)}を働かせ、自己の動きを探究し高めるというプロセスにおける資質・能力を育成する必要があると考えた。そして、自己の動きを探究し高めることで、運動の特性に応じた楽しさや喜びを味わい、それらを他者と共有することが運動に親しむことにつながると考えた。

前研究では、批判的思考の四つのプロセスを用いた学び合う活動を通して、自己の問題の解決に向けて適切な動きの決定を行わせた。^{注2)}そこでは、子供たちは仲間から伝えられたことやICTで記録したものを基に動きを把握し、自己の動きを吟味して決定することができた。しかし、子供が問題を発見する際に、単元を通して求める動きに対して最適ではない問題を発見してしまう姿が見られることがあった。単元を通して求める動きに対して、問題が適切であるかを振り返らせることが足りなかったためだと考えられる。また、単元を越えた学びの転移が行われず、別の種目になったときに知識がいかされた動きが見られないこともあった。これは、単元を通じた学びの振り返りが適切に行われなかったことで、知識の関連付けがされず、深い理解を伴った知識にすることができなかったからだと考えられる。これらのことから、メタ認知を促進させ、振り返りをさせる必要があったと考える。

そこで、メタ認知を効果的に促進させることで、運動の特性に応じた問題を適切に発見させることができるようになるかと考える。その問題の解決のためにこれまでの学びによって得られた知識を整理したり、知識を組み合わせ新たな動きを考えたりして、それらを繰り返し試す中で、適切な動きの決定することができ、動きを高めることができるようになるかと考える。また、子供たちのメタ認知を効果的に働かせ、それまでの探究課題の解決を振り返らせることで、特定の状況、目的に応じて、知識を整理したり、関連付けたりすることにつながり、種目が変わったときにも学びの転移がおき別の種目で、身に付けた知識・技能をいかして運動することもできると考える。それらが、運動の楽しさや喜びを味わうことにつながり、さらには、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することにつながると考える。

以上のことから、「自己の動きを探究し高めることができる子供を育てる保健体育科の授業」という研究主題を設定した。

II 研究の概要

1 保健体育科が目指す子供像

保健体育科では、目指す子供像を次のように設定し、研究に取り組むこととした。

自己の動きを探究し高めることができる子供

探究課題^{注3)}を解決する過程において、探究課題に応じた問題の発見から、自己の動きを高めた上で適切な動きの決定を行うことで、目指す子供像になると考える。

2 育みたい資質・能力

保健体育科における目指す子供像に近づけるために、次のような資質・能力を育んでいくことが必要であると考えた。

探究課題に応じた問題を発見し、問題の解決に向けて、適切な動きの決定をする力

「問題を発見する」とは、探究課題を解決する上で、様々な問題を踏まえて最も問題となっていることを判断し選択することである。それをすることで、動きの決定に向けて問題解決の見通しをもたせる。適切な「動きの決定」とは、問題を解決するために様々な動きを考え、それらを繰り返し試し、自己の動きを高めた上で何が最も有効なのかを判断し選択することである。

これらの資質・能力を育んでいくことで、子供たちは、保健体育科が目指す子供像になると考える。

3 資質・能力を育むための手立て

保健体育科では、資質・能力を育むために、次の二つの手立てを設定した。

(1) 単元構成の工夫

単元を探究課題の解決に向けて、「運動に出合う場」「運動に親しむ場」「振り返る場」の三つの場に分ける。

「運動に出合う場」は、ミニゲームなどを通し、探究課題を解決するために必要な動きを問うことで基礎・基本の知識・技能を学ばせる場である。

「運動に親しむ場」は、メインゲームなどを通して、探究課題に応じた問題を発見し、適切な動きの決定をして運動に取り組ませることで、探究課題の解決をさせる場である。問題の発見では、メインゲームなどを繰り返す中で、探究課題を解決する上で、他者の考えも含め、様々な問題を踏まえて最も問題となっていることを選択させ、学習プリントに記述させる。動きの決定では、問題の解決をするために、知識を整理したり、知識を組み合わせ新たな動きを考えたりしてどのような動きをすればよいのかを繰り返し試して、適切な動きの決定をさせ、学習プリントに記述させた上で、その後のメインゲームなどで意識させる。

「振り返る場」は、探究課題の解決を振り返らせる場である。ここでの振り返りが、獲得した知識・技能を関連付けさせ、深い理解を伴った知識・技能を身に付けることになる。

このように場を設定することで、探究課題を解決するために「運動に出合う場」で学んだ基礎・基本の知識・技能を「運動で親しむ場」で活用・探究させ、問題の発見から動きの決定をすることができる。さらに、子供たちは、主体的に問題解決をさせていくことで自己の動きをより

高めることができると考える。また、「振り返る場」で課題解決を振り返り獲得した深い理解を伴った知識・技能をいかして他の単元で問題の発見から動きの決定をすることにつながると考える。

(2) 拡散的思考と収束的思考を働かせる場面の位置づけとメタ認知を促進する場面の位置づけ

「運動に親しむ場」において、探究課題を解決する際に、拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定する。拡散的思考は、問題を発見させる際に働かせる。まず、メインゲームなどを通して、チームや全体に問い掛けたり、子供たちに全体で話し合わせ発表させたりするなどして問題を把握させる。さらに、その後のメインゲームなどでは、「探究課題を解決する上で他に問題となっていることはないか」などと問い掛け、今までに挙げた問題を整理させたり、さらに問題がないか振り返ったりさせる（「モニタリング①」）。そうすることで、他者の考えも含め、様々な問題を踏まえて最も問題となっていることを選択できるようにさせ、学習プリント（資料1）に記述させる。また、問題の解決に向けた適切な動きの決定をさせるために、子供が知識を整理したり、組み合わせで新たな動きを考えたりして、様々な動きを創り出す際にも拡散的思考を働かせる。その際に、様々な動きを考えることができているかを問い掛ける（「モニタリング②」）。そうすることで、考えた動きを整理したり、さらに有効な動きがないかを考えたりするようになる。収束的思考は、考えさせた様々な動きを繰り返し試し、適切な動きの決定をさせる際に働かせる。その際、問題を解決するために、考えた動きを繰り返し試して、有効であることを確認しながら動きの決定をしようとしているかを問い掛ける（「モニタリング③」）。そうすることで、考えた様々な動きを繰り返し試し、適切な動きの決定をできるようにさせ、学習プリントに記述させる。

「振り返る場」において、探究課題の解決に向けて適切な動きの決定をどのような流れで考え、決定するに至ったのかを振り返らせる（「リフレクション・モニタリング①」）。拡散的思考・収束的思考を働かせることができていたかを確認させることで、子供が他の単元で問題の発見から動きの決定をする際に、拡散的思考・収束的思考をより働かせて考えることができるようになる。また、深い理解を伴った知識・技能とするため、課題解決後に、自己の動きだけでなく、他者の動きについても振り返らせ、探究課題を解決するために、必要な動きは何かを学習プリントに記述させる（「リフレクション・モニタリング②」）。特定の状況や目的に応じて、知識を整理したり、探究課題の解決につながった自己の動きや他者の動き、これまでの知識を関連付けたりすることで、深い理解を伴った知識・技能として身に付け、それをいかして他の単元で問題の発見から動きの決定をすることにつながると考える。

場	運動に出会う場	運動に親しむ場			振り返る場
		問題の発見	動きの決定		
流れ	探究課題の提示	問題の発見	動きの決定		振り返り
思考		拡散的思考	拡散的思考	収束的思考	
メタ認知		モニタリング①	モニタリング②	モニタリング③	リフレクション・モニタリング①②

【単元の主な流れ】

4 資質・能力が育まれたかの評価について

学級全体の傾向を活動の様子や学習プリントから見取り、資質・能力が子供たちにどの程度育まれたかを評価することで、手立ての有効性を検証する。

5 研究の経緯

1年次では、単元構成の工夫として、探究課題の解決に向けて、「運動に出合う場」、「運動に親しむ場」、「振り返る場」の三つの場に分け、段階的に学ばせたことが、基礎・基本の知識・技能を活用して、運動の特性に応じた問題の発見から適切な動きの決定を行い自己の動きを高めることにつながった。さらに、「振り返る場」で探究課題の解決について振り返らせたことが獲得した知識・技能を関連付けさせ、深い理解を伴った知識・技能を身に付け、それをいかして他の単元で問題の発見から動きの決定をすることにつながった。

また、「運動に親しむ場」において、問題の解決のために動きの決定をする際に拡散的思考と収束的思考を働かせる場面を設定した。それにより、問題を解決するために、考えた動きを繰り返し試させて動きの決定をさせることができた。さらに、動きの決定をさせる際に「モニタリング」をさせることで、拡散的思考と収束的思考をより適切に働かせることができた。また、「振り返る場」において、「リフレクション・モニタリング」をさせることで思考過程を振り返らせることができた。これらは、動きの決定をさせる際に有効であったといえる。しかし、問題を発見させる際に、自分の考えのみに焦点が当たり、他者の考えを含め、様々な問題を踏まえて最も問題となっていることを選択することができなかつた。これは、動きの決定をさせる際のみ教師が働き掛けをし、問題の発見をさせる際に働き掛けをしてこなかったためと考える。そこで、拡散的思考を働かせる場面を見直し、探究課題を解決する際に拡散的思考と収束的思考を働かせる場面として位置付け、問題を発見させる際にも拡散的思考を働かせ、それを適切に働かせることができているかを「モニタリング」させることで、様々な問題を踏まえて最も問題となっていることは何かを考えさせることができると考える。

6 2年次のねらい

2年次は、拡散的思考を働かせる場面の位置づけと「モニタリング」の具体化の方法を見直し新たな場面に位置付ける。それが、問題の発見をさせる際に、様々な問題を踏まえて問題を選択させられるようにしていき、資質・能力を育むために有効であったかを検証する。

注1) 運動やスポーツについて、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の特性等に応じて「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること

本校では、運動の特性に焦点化した捉え方を見方とし、その見方を踏まえ設定した探究課題の解決策を創り出したり、判断したり、選択したりすることなどを考え方としている。

注2) 前研究では、自己の課題を解決するために、活動の決定を行わせた。

注3) 探究課題＝運動の特性に応じた単元を通す課題

引用文献

1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年7月）解説－保健体育編－』文部科学省，2017年，6ページ

2) 鈴木直樹編『子供の未来を創造する体育の「主体的・対話的で深い学び」』2017年，14ページ

参考文献

一安晋太郎「体育授業でメタ認知能力の育成を促す」『体育科教育2018年1月号』大修館書店，2018年

奈須正裕編『よくわかる小学校・中学校 新学習指導要領全文と要点解説』教育開発研究所，2017年

深谷達史『メタ認知の促進と育成 概念的理解のメカニズムと支援』北大路書房，2016年

文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年7月）解説－保健体育編－』文部科学省，2017年

